杉並区

令和５年３月発行　第29号

在宅医療地域ケア通信

# 在宅医療と介護の今

今号の内容

●久しぶりの対面開催、身近な課題で話し合い ──4圏域の在宅医療地域ケア会議 …… 1～3面
●在宅医療推進フォーラムを開催しました ──映画『ケアニン』上映会&トークイベント …… 3面
●摂食嚥下支援を学ぶ ──在宅医療推進多職種研修 …… 4面

## 久しぶりの対面開催、身近な課題で話し合い ―4圏域の在宅医療地域ケア会議

本号では令和4年度に区内7圏域で行われた在宅医療地域ケア会議※（以下、「地域ケア会議」という）の第1回目のうち、前号で紹介できなかった井草、方南・和泉、高円寺、荻窪の4圏域について報告します。各圏域とも久しぶりに対面形式で開催され、グループワークでは活発な意見交換が行われました。テーマは「ICTの活用」（井草）、「退院支援の困りごと」（方南・和泉）、「認知症高齢者と家族の支援」（高円寺）、「認知症・独居高齢者の支援」（荻窪）と、他圏域においても直面する身近な課題でした。会議の構成は圏域ごとに工夫が感じられました。

### ●多職種連携システムへの理解を深める ―井草圏域

井草圏域の地域ケア会議は、令和4年11月2日に井草地域区民センターにおいて開催され、約60人が参加しました。「日常の療養支援ツールとしてICTの活用を共有しよう」をテーマに、杉並区内でも普及しつつある多職種連携ICTシステム「バイタルリンク（以下、「VL」という）」の機能説明や、実際の運用例の紹介があったほか、グループワークでは「日々の情報共有で困ったこと」「ICTはどのように使えるか」の2点について話し合いました。

まごころクリニックの山口優美院長が紹介した実際の運用例によると、直腸がんで入院治療し、その後自宅療養となった要介護3の高齢女性の支援においてVLを活用し、ZOOM機能を使ってサービス担当者会議を開いたそうです。患者、ケアマネジャー、山口院長は自宅で参加し、他の専門職は事業所で参加しました。訪問薬剤師がセットした薬を写真で見て確認するなど、視覚的に共有できるメリットを紹介しました。また、VL（杉並区版のVLの愛称は「杉介（すかい）ネット」）を普及させるために作成したキャラクター「すかいのすけ」（右イラスト）も紹介されました。

グループワークでは「コロナで退院時カンファレンスができず、ケアマネジャーも患者さんも在宅療養をどうすべきか困っている。こういう時にICTによる情報共有は助かる」「連絡ノートや電話（折り返し待ち）だとタイムラグが生じ、情報のタイムリーな共有ができない場合がある」などICT活用の利点を指摘する声が出た一方、「VLなどは立ち上げに時間がかかる」「従来の電話、メール、ファックスのほかにVLの報告が加わると作業が増える」という指摘もありました。

※医療と介護に携わる地域の関係者が、圏域ごとに集まって課題に向き合う会議体

## ●信頼関係を築く糸口は ―方南・和泉圏域

方南・和泉圏域の地域ケア会議は令和4年11月22日、永福和泉地域区民センターにおいて開催され、約90人が参加しました。「退院支援の困りごと」をテーマに、ケア24方南（地域包括支援センター）から次のような困難事例が紹介されました。末期がんの状態で退院し、自宅で最期を過ごしたいと決めた単身男性のケースです。病状が悪化して一人での外出や排せつも困難になってきている一方で、こだわりが強く、医師の提案を聞かず、業者による部屋のごみの片付けも嫌がります。この事例について、最初は多職種で、次に職種ごとに意見交換をしました。

利用者を支援する種々のサービスにつなげる鍵となるのは、利用者との信頼関係の構築です。多職種のグループワークでは、どの職種が利用者にアプローチしやすいかが話題になりました。その後の発表では、利用者から見ると、看護師は自分に何をしてくれているのか分かりにくいが、ヘルパーやリハビリを指導する理学療法士などなら分かりやすく、信頼関係も築きやすいのではないか、という意見がありました。

対面でのグループワークは熱が入ります

職種ごとのグループワークでは、利用者の経歴を知ることが関係性づくりの糸口になるのでは、という意見が出ました。また、利用者が本当に望んでいることを聞き出すことが必要であり、これはケアマネジャーだけではなく、多職種で取り組むべきものという指摘もありました。このような事例では、支援の初動から多職種が連携することが求められますが、利用するサービスが決まらない段階では、多職種は動きがとれないという課題があります。

## ●介護者に息抜きを ―高円寺圏域

高円寺圏域の地域ケア会議は、令和4年11月29日に杉並区役所本庁舎において開催され、約70人が参加しました。「認知症高齢者と家族の支援を考えよう～私たちができる多職種連携～」をテーマに、認知症の妻を高齢の夫が介護する事例を取り上げました。妻には他人が家に入るのを嫌う傾向があり、転倒による圧迫骨折で、一時入院していましたが、入院中も他人に体に触れられると嫌がったといいます。

グループワークでは、介護する夫を心配する声が複数あり、デイサービスなどを利用して介護者のレスパイト（息抜き）の時間を作るとよい、妻を外出に誘うには、口紅などを塗ってあげると気持ちが前向きになる、などのアドバイスがありました。また、訪問診療から始めると次第にほかのサービスも受け入れやすくなるのではないか、との意見も出ました。

事例についての話し合いのほか、認知症の方への支援に関して、以下のような体験談も紹介されました。「デイサービスで『風呂は夜に入るもの』と、昼間の入浴を拒絶する利用者に、『温泉気分でぜいたくを味わいませんか』と誘導したらうまくいった」。「一包化された薬を嫌がる利用者が、自分で包装シートから取り出したいと思っていることが分かり、一包化の作業を利用者と一緒に行ったところ、薬を受け入れてくれた」。これらの成功事例は参加者の共感を得ていました。いずれも、認知症の利用者の気持ちを理解し、寄り添うことで解決策が見出されたものでした。

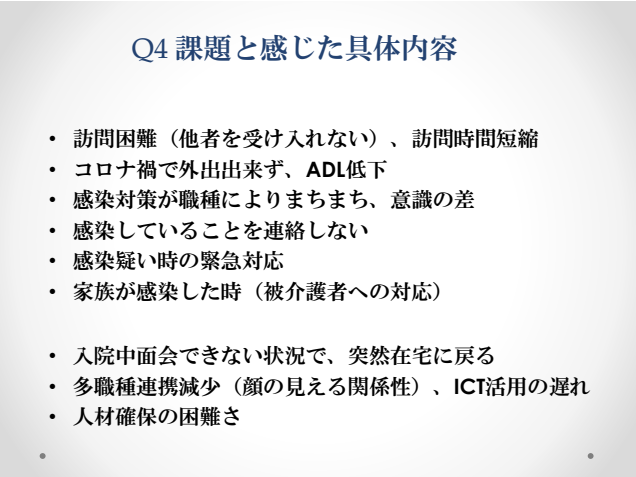
会議の最後に全員で「1・2・3　ダァー!!」

### ●コロナ禍が現場に影響 ―荻窪圏域

荻窪圏域の地域ケア会議は、令和4年12月1日に杉並区医師会館において開催され、約70人が参加しました。テーマは「令和4年度版アンケートから考える医療・介護連携」です。アンケートは区内全域の関係職種を対象としたものです。医療・介護現場で「課題と感じた具体的内容」の設問では、「コロナ禍で本人や家族が身内以外の人を家に入れない」「本人が外出できないことで、思いのほかADLが低下している」「入院中で本人に面会ができず、ADLも判断できないまま在宅に戻されるケースがある」「多職種連携が減少している」などの回答が紹介され、コロナ禍の影響が大きいことが示されました。

グループワークでは「認知症」「独居の高齢者」をキーワードに、日常療養上の課題と改善策について話し合いました。その中で「患者の症状の変化について医師と薬局の間で情報共有ができているケースがあり、薬局を介して他職種の情報を医師につなげることができる」（薬剤師）、「急性期の治療後の退院先がスムーズに決まらないケースが増えた。ZOOMなどを活用したカンファレンスが必要」（病院看護師）、「家族やその周辺の人が、緊急時の相談先が分からず困る場合は、マイナンバーカードなどに関係者の連絡先をシールで貼るなどの“見える化”をしたらどうか」などの提案がされました。

安田医院の安田正之院長からは「患者が一番親しくしている人をキーパーソンにして、多職種が関わっていくと対応がしやすい」とのアドバイスがありました。



報告されたアンケートの回答

## 在宅医療推進フォーラムを開催しました ―映画『ケアニン』上映会&トークイベント

1月22日に、座・高円寺にて杉並区在宅医療推進フォーラムを開催しました。

認知症の方を支える介護の現場を描いた映画『ケアニン』を上映し、その後、この映画のプロデューサーの山国氏（右写真）をお招きしたトークイベントを開催しました。山国氏からは、介護をテーマにした映画を撮ろうと考えた理由や映画製作時のこだわった点などをお話しいただきました。製作にあたって、介護現場を取材していくうちに、当初思っていた「介護の仕事は大変」「映画のエピソードは創作が必要」「認知症になったら人生終わり」といったものは、偏見や誤解であったと気づいたそうです。介護や医療に携わる方々との出会いで大きく人生観が変わり、「介護」が自分自身のテーマになったとのことでした。また、監督をはじめ、この映画製作に関わった他の方々も、それぞれの思いを重ねて「これは自分自身の話」と感じ、映画を作り上げたそうです。

「介護職は人生に寄り添う究極のプロフェッショナル」という山国氏の言葉が、来場者の心に響いたのではないでしょうか。

## 摂食嚥下支援を学ぶ ――在宅医療推進多職種研修

令和4年度2回目の在宅医療推進多職種研修が2月22日、杉並区医師会館で「摂食嚥下支援のポイント」をテーマに行われました。医師、歯科医師、看護師、ケアマネジャーら約40人が参加しました。

日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニックの高橋賢晃医長（写真左）から、摂食嚥下障害が発生する原因や嚥下機能評価の方法についての解説があり、続いて杉並PARK在宅クリニックの田中公孝院長（写真右）からは、摂食嚥下障害がある独居の高齢者の支援を巡って、サービス担当者会議を開くことになった実例の紹介がありました。

グループワークでは「嚥下障害がある非常に頑固な独居高齢者に、嚥下が難しい食べ物を食べたいと言われたら、多職種とどんな相談をしますか?」について話し合いました。

発表された主な意見を整理すると、「本人に咀嚼力があるのなら、リスクがあっても食べさせてもいいのでは。本人の意向に沿いたい」「嚥下評価をしっかりしたうえで、食べやすいものから少しずつ本人が希望する状態に変えていくのがよいのでは」「食べることは生きる上で一番の楽しみなので、本人の意思を尊重したい。本人が何を食べたいか、どう生きたいかを改めて確認し、嚥下評価を再度やってみたらどうか」など、本人の意思を尊重する意見が多くありました。

一方で、「在宅なので好きなものを自由に食べさせてあげたいが、サービス担当者会議を通じて医師、専門職の意見を聞いたうえで、参加者が納得できる形にしたい」という意見や、「ヘルパーとしては食べさせてあげたいが、ケアマネジャーと連携しながら『事故のリスクがあるのでできない』ということを本人に伝え、徹底したい」という慎重論もありました。

田中院長からは、「摂食嚥下は多職種連携の最難関に位置するテーマの一つで、本人の希望、家族や関わる職種の思いや不安などの心理社会的要素が強い。だからこそ、多職種の密な連携が必要」という指摘がありました。

## 令和4年度版　杉並区在宅療養ブックを発行しました

在宅医療を支える医療機関や、介護サービスを提供する事業者等の情報を掲載しています。

在宅にて療養している方や、在宅療養を支援している方など、多くの皆様に活用していただきたいと思います。

**【配布場所】**

在宅医療・生活支援センター（ウェルファーム杉並）、介護保険課（杉並区役所）、ケア24の窓口　等

### 在宅医療・介護保険サービス事業者・地域の集いの場情報検索システム

高齢者やその家族の方などに在宅医療や介護が必要となったとき、地域の集いの場を探したいときなどに活用できます。

スマートフォンからもご利用できますので、ぜひご覧ください。

**【アクセス方法】**

●直接URLを入力する
https://carepro-navi.jp/suginami

●杉並区公式ホームページ
https://www.city.suginami.tokyo.jp/　から
「在宅医療・介護保険サービス事業者・地域の集いの場情報検索システム」と検索する

●二次元コードを読み込む

★次号は令和５年７月発行予定です。



〈編集・発行〉 杉並区在宅医療・生活支援センター（電話：5335-7317）